

橋本芳契先生



1989年1月28日、金沢の橋本芳契先生宅で。今でも元気な声が聞こえる。

昭和三十八年、三八豪雪の年に私は金沢大学に入った。大学に入ったけれど講義のほとんどはつまらなくこれが大学の授業かと思うものばかりだった。そのなかで教養課程の「哲学」（だったと思う）の橋本芳契先生の講義だけは違っていた。最初の授業の日、先生は教室に入って来られてすぐ黒板にインドの地図を貼って話し始められた。それは昭和三十六年にブノンペンで開催された第六回世界仏教徒会議に出席されたあと、インドの仏蹟巡拝をされた時の話であった。仏教に接した最初であった。他の大学に行った友人が「仏とは何か」という切実な質問を発していることを知ったのも、仏教を勉強しようと思ったきっかけのひとつであった。

個人的な悩みを聞いてもらうため寺町にある先生のご自宅におじゃまし、延々と（悶々と言った方が近い）話したあと、玄関を出るとき、先生は奥様と一緒に家の中で正坐して私に向かって深々とお辞儀をされた。聞いてもらうべきところに来て聞いてもらったのだとそのとき心から思った。

専門は理学部の化学だったが金沢大学卒業後も、暇をみて金沢の先生の家を訪ねていた。それは金沢に行く楽しみのひとつだった。

昭和五十年三月、先生は金沢大学を定年退官され、同年四月新設なった福井県立短期大学に招かれ着任された。前年私は結婚して福井に住んでいた。先生が福井に来られることを知って個人的に教えを乞うと自分で勝手に決めて、先生が週のうち三日ほどを過ごされる県立短期大学職員寮（福井市河増）に、先生の専門である維摩経を一字一句すべて教え下さいと頼みに行った。先生は快く承諾して下さった。

教えていただいた維摩経を『維摩経講話―浄土の経への解説―』（山喜房佛書林、平成四年十月）として出版することが出来た。そのときの講義の様子や出版までのいきさつについてはこの本の後書きに書いたのでここで割愛する。箱に入った立派な本が出来たことを先生はとても喜ばれた。それがうれしかった。維摩経の講義が終了したあととも「大乘起信論」を同じようなスタイルで教えてもらったが、これは本には出来なかった。

平成六年の秋だったのでないかと記憶している、家族の方から先生が軽い脳溢血で倒れられたと連絡があった。すぐに知らせてもらった金沢の病院にお見舞いに行った。先生はベッドにおられたが私が帰るときは病院の廊下の待合室まで点滴の装置をつけたまま歩かれるほどの状態であった。それが病院を変えられることに悪化していった。最後

の数年は自宅でご家族の看護を受けられていたが、元氣なときにあれほど豊かであった言葉をもう何も聴くことが出来ず、寝たままの先生を見て帰るだけだった。それでも毎日見ておられる家族の方は、「今日は確かに違います、来られたのが分かっていますよ」と言われ、数ヶ月ごとだったが来てよかったのだと思った。

平成十三年四月十八日、先生は九十一歳でこの世を去られた。葬儀に参列し、親族親戚に加わって私も骨を拾ってほしいと家族の方から言われ、火葬場に行った。先生は少しだけの骨になって出てこられた。

葬式から何日か経って妻と一緒に金沢市内を見下ろす墓地に行った。何かが終わったというより、今から何かが始まるのだという気を強くした。

浄土はあつたら大騒動で、ないから浄土なのだと言われ説明されている。いまはそのことを自分なりに理解することが出来る。浄土とはこの世ではあり得ないところだから、そこに心を寄せることは、決して実現し得ないことを持ち続けることになり、それがこの世での身持ちをしゃんとさせることになると言えば、先生は何と言われるだろうか。どんなことも聞いてもらえることだけは間違いないと思っっている。